【名古屋学院大学シンポジウム】

語ろう名古屋！　歴史の流れを未来へつなぐ　～界隈の創造力～

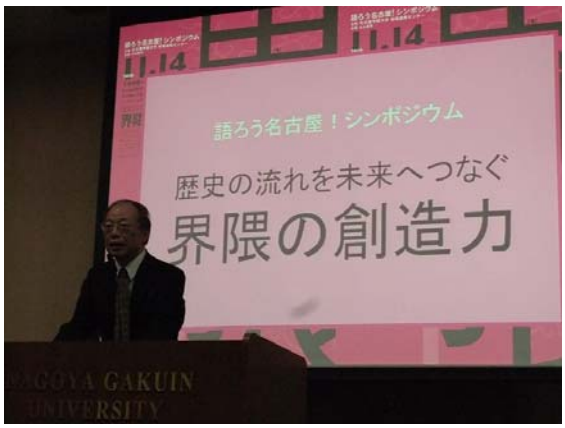
2010 年 11 月 14 日（日）14：00～16：30
名古屋キャンパス白鳥学舎翼館クラインホール
【参加者　210 名】

◆開会挨拶

小嶋博（名古屋学院大学学長）

本日はお忙しいところ、たくさんお集まりいただきありがとうございました。

当大学がこの地にきて４年目になりましたが、移転するにあたって地域の方々との語らいを行いまして、大学の地域に対する貢献度が課題となっています。熱田区は高年齢層が多いことからなかなか活性化できず、日比野地区でも名古屋市の日比野再開発計画が頓挫してしまうという問題もあり、市の大きな課題となっていました。国有地であるこのイベント跡地を、公園拡充地という理由から払い下げをしてもらいましたが、熱田区の活性化のため、多くの若者に来てもらうために、大学を誘致する計画になったそうです。ちょうど当大学が土地を探していたときで話が合い、移転することになりました。その際に、市の条件があり、大学の３学部が全て移転すること、50 年借款ですが大学と公園の周りに敷居を作らないこと、市民にすべての施設を公開することでした。朝、地域の人たちが自動販売機の前に座ってコーヒーを飲みながら団らんする光景が見られます。また、大学の食堂で地域の人が家族連れで来られたり、図書館を利用したりしています。地域連携センターでは、マイルポストという事業を日比野地区の住民の皆さんと進めています。地域に根差してやっていこうとしています。まさしく、老若男女が互いを理解すれば、日本の未来は盤石だと思っています。大学内の優れた教授陣の知恵を社会に反映させ、互いに連携しながらやっていければ、大学がこの地に移ってきた意義と大学の存在理由が出てくると思います。地域のみなさんとどのように手を取りながら地域を活性化していくか、またみなさんが大学をどのように盛り上げていったらよいか、また若者にどのように期待をつないで将来の日本を託していけばよいかという点を含めて、本日の話について考えて頂ければと思います。



◆モデレーターセッション

古池嘉和（名古屋学院大学地域連携センター長、経済学部教授）
水野晶夫（名古屋学院大学経済学部教授）
三輪冠奈（名古屋学院大学商学部准教授）

古池：

名古屋市は、駅前に高層ビルが立ち並び、高速道路もできつつあり、日本に名高い近代都市となって

います。そのような巨大な資本に支配されている一方で、200 万人を超える人が生活し、名古屋の外からたくさんのお客が来ています。都市というのは、いつの間にか暮らしの視点で語られることが少なくなり、あるいは歴史の流れの中で人々が培ってきた文化を継承して育てる力が弱くなってきた気もしています。

最近は、コミュニティの再生といったことが言われており、そのような横文字ではなく、私たち日本人が過去から受け継いできた「界隈」という、ある意味曖昧な言葉ですが、“大体このあたりで楽しく暮らそう”という界隈の力をもう一度生活の視点で取り戻そうということが本日のシンポジウムのテーマです。

今日は、たくさんある界隈の中から、３つの代表的な界隈を取り上げ、その歴史や今行われていること、今後どのようにつながっていくのか、それぞれのセッションで議論していきたいと思っています。

まず、今日の見どころ、聴きどころをモデレーターからご紹介いただきたいと思います。

水野：

熱田・港界隈は、ランドマークとして熱田神宮があり、年間 650 万人が参拝する集客力が高い施設となっています。しかし、一歩道路を隔てた商店街はシャッター通りとなっており、市が再開発を計画している空き地もあります。堀川の西側には年間来場者 200 万人程の国際会議場、その南には年間来場者 10 万人の白鳥庭園があります。港区には、年間来場者 230 万人程の水族館があり、今は亡きイタリア村はオープン当初年間来場者 400 万人でしたが、残念ながら 2008 年に閉館となってしまいました。

これほどランドマーク的なものがあるにもかかわらず、まちや界隈へのしみ出しが弱いのが現状です。しかし、界隈や隅々には、熱田は古いまちなので神社仏閣含めていろいろな発見があり、港にもいろいろな楽しみ方がたくさんあります。

本日は、コンテンツ探しを含めて、今後どのように大学や地域の方々が関わるとおもしろいまちになるのか、既にまちを動かして実践している２人の方に話を伺いたいと思っています。

古池：

次に、近代的な歴史から近代産業まで、たくさんの歴史が凝縮した場所である東区界隈について、ご紹介いただきたいと思います。

三輪：

東区界隈は、東区を中心として西側は名古屋城から東側は徳川園までの一帯が「文化のみち」エリアとして、古い邸宅など昔からの歴史的な町並みが残されています。後ほど名古屋おもてなし武将隊の演武があり、信長公から話も伺いたいと思っています。

「文化のみち」は、江戸から明治、大正、昭和にかけての歴史的なまちなみが多く残っている場所で

す。市政資料館は大正からの建物であり、シャンデリアやステンドグラスなど昔からの貴重な調度品等が多く残っています。白壁エリアでは、文化のみち二葉館などの洋館の他、旧豊田佐助邸や春田鉄次郎邸などの和風建築も多く残されています。こういった建物はレストランや料亭などに利用されています。徳川園は、大変手入れの行き届いた池を中心とした大名庭園となっています。こういった古い歴史的な建物が今後どのように移り変わっていくか、話をしていただきながら進めていきたいと思っています。

古池：

後ほど、名古屋おもてなし武将隊を迎えて、歴史の流れをどう未来につなぐのか、聞きたいと思っています。

長者町界隈では、先日、あいちトリエンナーレが開催され、日本を代表する繊維街に新しいアートを入れ、想像力をかきたてていこうという意欲的な取り組みが行われました。その長者町界隈について議論を行っていきたいと思います。

◆長者町界隈　事例１　繊維問屋街と現代アート

モデレーター　古池嘉和（名古屋学院大学地域連携センター長、経済学部教授）

パネリスト　　新見永治氏（あいちトリエンナーレ 2010・サポーターズクラブ事務局）

　　武藤隆氏（大同大学工学准教授あいちトリエンナーレ 2010・アーキテクト）

古池：

武藤氏は長者町に生まれたと聞いていますが、長者町の特徴と、あいちトリエンナーレで地域の建物やまちなみに現代アートが展示されたことについて、お聞かせください。

武藤氏：

あいちトリエンナーレでは、アーキテクトとして、会場全般を担当しました。また、長者町を中心とした錦 2 丁目まちづくりに関わっています。

長者町通は外堀通から白川公園に至る 2 km 弱の道です。あいちトリエンナーレは、錦 2 丁目にあたるブロックで行い、一般的にそのあたりを長者町界隈と呼んでいます。昔から北に名古屋城を望み、城下町として栄えてきた場所です。長者町繊維街という看板が掲げられ、通常の街とは違う雰囲気を醸し

出しています。繊維問屋街は、不況のあおりや中国への生産拠点移転などによって次第にシャッター通り化していく中で、ここ 10 年程で空きビルを再生したりまちをどうしていくか街ぐるみで動かしていたところに、あいちトリエンナーレが開催されました。

長者町は名古屋城の真南、テレビ塔の真西にあり、テレビ塔とミッドランドスクエアを結んだ線と、名古屋城と名古屋市美術館を結んだ線との交点にあり、ポテンシャルが高い場所にあります。そこに可能性を見出して、あいちトリエンナーレの会場にもなりました。江戸期の地図を見ると、近辺に寺社などの会所が点在し、古くからエリアの人々のパブリックスペースとなっていました。

長者町以外のトリエンナーレの会場は点在していましたが、これは 400 年前の名古屋の慨形と同じです。長者町会場では、16 ブロック内に会場が点在していましたが、有料で会場を借りた場所はなく、まちの方の行為で使っていない場所やもう貸せないような場所を借りて行いました。

（スライドにて、あいちトリエンナーレの作品の紹介）

会期後半にうは「ゑびす祭」と連動して開催しましたが、もともとあいているスペースをうまく活用するという気質があったことと、その空きスペースを芸術家がうまく見つけて作品を作っていったことの両方があって、おもしろい展示ができたのではないかと思っています。最終月には行列ができていました。単にアートが街に入ってくるだけで成功するという訳ではなく、まちを作ろうとしたアーティストや実際に作った人、まちを提供してくれた人が一体感を持って参加することで、まちとアートを結ぶ原動力となりました。

古池：

高層ビルが立ち並んでいるまちでも、実際に歩いてみると、歴史の記憶の断片が残っています。それを、アーティストが関わって記憶を呼び戻そうという取り組みを行い、それに人が関わったというお話であったと思います。次に、新見氏は長者町会場で AT カフェを運営されていましたが、その取り組みを紹介して頂けますか。

新見氏：

長者町会場の伏見駅に近い場所で、地下 1 階地上 4 階建の築 50 年のビルをまるごと借り、地下 1 階にイベントスペース、1 階にカフェとサポーターズクラブの事務局、２～４階に展示会場として使いました。サポータークラブの会員獲得のために、2 日に 1 回程度地下でイベントを行いました。参加アーティストのトークや名古屋の地形的なアートの歴史をひも解くテーマや、長者町界隈をテーマにしたトーク、事務局を拠点としたまち歩きなどを行いました。サポータークラブは誰でも加入できるあいちトリエンナーレの応援団であり、その会員は最終的には 5,000 人にもなり、次のトリエンナーレに向けて残して持続的な活動にしていこうという考えですので、地元の方々からは大きく期待を頂いているところです。

私自身は地下に閉じこもってイベントを運営していたので、すぐ外に出たところにいる長者町界隈の人々との接点はなかなか持ちにくかった、というのが実際のところです。

古池：

古いまちは、よく見るといろいろ残っているのですが、それを誰が気づかせてくれるのかが問題です。

現代アートがつなぐ例として、自然の中での例としては佐久島などがありますが、市街地の中で歴史の断片をつないでくれる役割を現代アートがしているという例も各地で見られるようです。その点についてご意見を頂きたいと思います。

武藤氏：
　今年、瀬戸内国際芸術祭があり、直島や小豆島など複数の島に点在させてアートめぐりができました。昨年は越後妻有トリエンナーレが開催されました。これらは、あいちトリエンナーレと比較すると、山村や離島で景色がよく料理もおいしく、観光気分でアートをめぐってもらう観光型のイベントでした。一方、来年、横浜トリエンナーレが開催され、港に特化したまち型の展開がされます。また別府でも現代芸術フェスティバルが開催されていますが、観光地でもあり市街地でもある地域なので、長者町とはまた違う形になります。このように非日常的な観光型と、日常的な市街地型とがあります。

古池：
　地域と人とのつながりをアートが繋いでくれて、新しい創造力を生みだす場所としてつながっていくような気がします。地域の人のつながりについて、今回のイベントで見られたことがありますか。

新見氏：
　地下にこもりがちだったので、地域の人々との接点が少なかったという面があります。築地や大曽根のアートイベントや祭りにも参加していますが、個性豊かな人や年齢層の異なる人、行政との関係があり、なんとかもっと皆がフラットになれるとよいと思います。それを促進する役割をアートが担うのだと思います。強力なリーダーシップが引っ張る時代から転換しつつあります。

古池：
　長者町でのあいちトリエンナーレの成果は、現代アートに関心を持っていただいた点もありますが、そのプロセスでいろんな人が関わってつながりが出てきたという点が大きく、フラットなつながりから出てくるような気がします。界隈の想像力を促すつながりの糸口として現代アートは有益であると思います。

◆熱田界隈・港界隈　事例２　歴史と未来を結ぶ

モデレーター　水野晶夫（名古屋学院大学経済学部教授）
パネリスト　　古橋敬一氏（港まちづくり協議会事務局次長）
　　相羽寿郎氏（クリエイターズマーケット主催　(有)ビータ代表取締役）

水野：
　相羽氏は、クリエイターズマーケットを年２回開催し、空きビルを活用したさくらアパートメントを栄で展開されました。

相羽氏：

作る人の祭典ということで、東海圏が６～6.5 割、その他は他地域からものづくりの人々が集まって、次回は 12 月 11 日・12 日にポートメッセ名古屋で開催します。アート、デザイン、ファッション、クラフト等のオリジナルワークであることが唯一の出展条件で、1400 組 3100 人が参加し、来場者数は２日間で４万人程となっています。

アート、デザイン、ファッション、クラフトは、発表や展示の場がなく、あっても多額のお金が必要となっています。しかし、このイベントでは、低い予算で出展でき、多くの人に見てもらって気にいってもらえたら買ってもらえる上、来場者と作り手とがじかにコミュニケーションをとれる場となっています。各地で手づくり市やフェアなども行われていますが、そのほとんどが屋外です。屋内で安心して多くのお客さんに見てもらえる場所づくりをしたかったのがこのイベントを開催する大きな理由です。関係者も多く来てもらえ、ビジネスチャンスもたくさんあります。そういった場がありそうでなく、世の中に作り手はたくさんいても、発掘されなかったり、趣味でものづくりをしていても友達にあげるだけで終わってしまいます。それをお客さんに買ってもらうことは、趣味でやっている人にとってもものづくりの楽しみになります。このようなイベントで 10 年続くことはめったにないのですが、年々出展者も来場者も増えています。友達にあげるだけでは正当な評価が出ないので、レベルアップにつなげられます。

商店街やまちの活性化にこのようなイベントを活用できないかという話もたくさんありますが、単発的にしても意味がないので、継続的な活かし方をどうしていくか、今日話し合っていきたいと思います。

水野：

古橋氏は、名古屋学院大学の元学生でして、瀬戸の商店街活性化に携わり、マイルポストという学生の店に取り組んでいました。商店街はその後、経済産業省のがんばる商店街 77 選に選定され、今でも元気な商店街となっていますが、その火付け役となりました。

古橋氏：

全国に 13,000 ある商店街のうちの 77 に選ばれたというのはすごいことだと思います。その話題性は何かと言えば、学生や大学が商店街に入り、地域活性化を手伝ったという点だと思います。思い返してみてもとにかくおもしろく、多くの内装は自分達で行い、全て手作りで行いました。

水野：

その後、2005 年の愛・地球博の地球市民村で、ナチュラルフードカフェの店長をやられました。

古橋氏：

地球市民村では環境をテーマにしたＮＰＯなどがパビリオンを１つ持っており、NPO 法人 BeGood Cafe と一緒に組んで、108 席の屋外型のカフェスペースを作りました。そこに畑を作り、レストランから出る雑廃水をバイオフィルターで浄化して米を作ったり、野菜などの切りくずをミミズに食べさせて作った肥料を使って野菜を育てたり、循環型のしくみにしました。全国から 25 名を募り、半年間で畑の造成と仲間づくりを行いました。

水野：

港区の築地口に船券の場外販売所である「ボートピア名古屋」が 2006 年 8 月にオープンするにあたり、まちに何が必要かというアンケート調査を地域で行いました。すると、ボートピア名古屋の誘致をめぐって、賛成派と反対派でまちがぎくしゃくしていることがわかりました。ボートピア名古屋は、売上の１％を地域に還元するのですが、それが１億円を超えるため、そのお金のこともあって地元がぎくしゃくしていました。そこで、地域と違う人を呼ぼうと、「よそもの、ばかもの、わかもの」ということで、古橋さんが思い当たってお願いし、3 年前から事務局として、地域の人によってまちをつくっていこうとしています。

古橋氏：

港まちづくり協議会では、地域の中に人と人との交流の場をつくっていくことをしています。これまで人と人とが協働して何かを進めていくおもしろさや可能性を感じて、ぜひそれを職業にしていきたいと思っていましたが、まちづくりを仕事にしている方というのはそれほどいません。

ボートピア名古屋では、全国の競艇の船券を買ってスクリーンを見て競艇ができる施設です。3 年前、当協議会の年間資金は 1 億 8 千万で、売り上げはその 100 倍の 200 億円近くとなっています。ただ、その利用者は、地下鉄でたばこを吸ったり、道端で酒を飲んでしまったりする方が多いので、迷惑施設となっており、地元では賛成・反対の両方が当然出ています。築地口は学区の世帯が 2,000 世帯程度と非常に少なく、小学校 1 学年 1 クラスしかない規模のまちで、その学区内で２億円を使わなければいけません。行政の補助金としておりる公金ですので、その使い方は行政のルールで決めなければならなく、住民が決めていかなければなりません。私たちはそのお手伝いをしています。初年度は、1 億 8 千万円のうち 3,000 万円程度しか使えず、あとは全て返してしまいました。昨年になってようやく８割を使うことができました。事業は、まちの魅力づくり・賑わいづくりをする、暮らしやすいまちづくりをする、それが円滑に進めるようにするという３つの方針をたてて、その枠の中で行っていくということ以外は何も決まっていません。それをもとに自分達でディスカッションを行い、名古屋市が専門性を持ってやった方がよい事業を市に実施してもらう、自分達ができる事業を公募型で行う、住民と事業を協働して行うという３つを行うという形に整理しました。

（映像での活動紹介）

水野：

熱田・港界隈での賑わいづくり、観光まちづくりについてどうしたらよいと思いますか。

相羽氏：

界隈に実際にあるもの、生活であっても文化であっても良いのですが、そこからキャラクターやブラ

ンド、個性を創造して少しずつ PR し、にぎわいや活性化につなげていくことが大事だと思います。熱田神宮は熱田区のキャラクターではなく、熱田神宮という固有のキャラクターになっています。そうではなくて、地域ブランドを作るということが大事だと思います。今話題になっている地方のゆるきゃらは、わかりやすいキャラクターで、名古屋ではなごやおもてなし武将隊が有名になっています。

今までは、モノ、コト、人という考えがありました。モノは建物や歴史的史跡などですが、超有名な場所以外は人があまり来ません。次にコトで、イベントなどをやりますが、お金がかかるし、単発的になってしまいがちです。そうではなく、モノやコトを生かすのは人であり、実際に住んでいる住民が本気で活性化しようと思わなければモノもコトも生かされないと思います。

水野：

港まちづくり協議会でも、新しい人が新しい視点でやっていく、紡ぎ直しが隠されたテーマでした。

古橋氏：

熱田や港にいろいろなランドマークがあって、人がたくさん集まっても、その人達をどうするのか、その後のことをどうするかという時に住民の出番となります。地域の人にしかわからないこと、誇りに思っていることをもっと対話して引きだして、若者に教えてもらいたい、そのような場づくりが必要だと思います。

水野：

港区でまちづくりをしたい人は、港まちづくり協議会へ行っていただきたいと思います。熱田でも生涯学習センターや大学の地域連携センターでの組織づくりが始まっています。最後に、熱田・港のまちの展望についてお聞かせください。

相羽氏：

まちづくりは、点から線、線から面へという考え方を持っています。空き店舗やイベントなど点ではいろいろとやりますが、点だけでは消えてなくなります。点をつなげていくことで線になり、線を縦横つなげて広がって来ると面になります。それが界隈の活性化になると思います。熱田と港を太い線で結び付けるのが堀川だと思います。東海地区の人が集まってくるようなことを住民からやっていければ面白いと思います。例えば、堀川マラソン大会や市民サイクリング大会、カヤックやカヌー競争など、リアリティのあることをやって、住民を含めてみんなが楽しんでいければよいと思います。

古池：

点から線、線から面、次に面から立体化してみようということが大事です。クリエイターズマーケットは非常におもしろいイベントで、それを使って地域の問題を解決する、例えば大学でやるなど、うまく使っていければよいと思います。ものづくりをやっているひとは意外に近くにおり、そういった人たちの活躍の場を作っていくことで、みなさんの作り手の才能が開花するかもしれません。他のアーティストとの交流も生まれ、その輪が広がっていく中で大学も関係しているとなると、もっとおもしろいことになるのではないかと思います。

水野：
　人が大事ですし、それを生かすための仕組みづくりもあわせてやっていくと、点から線、線から面になっていくと思います。

相羽氏：
　今の時代、ものや情報があふれ、インターネットでバーチャルな世界が繰り広げられ、もうそれに飽きてしまっています。すると、今度はリアリティを求めるのです。1 番のリアリティはコミュニケーションです。住民の中のコミュニケーションも、外の人たちとのコミュニケーションも大事です。昔ながらの商店街でコミュニケーションをとりながら買物をするようなやり方が逆に求められてくると思います。

◆名古屋おもてなし武将隊による演武

◆東区界隈　事例 3　歴史を繋ぐ文化のみち
モデレーター　三輪冠奈（名古屋学院大学商学部准教授）
パネリスト　　名古屋おもてなし武将隊（織田信長）
　　井澤知旦氏（(株)都市研究所スペーシア取締役会長白壁アカデミア代表世話人）

三輪：
　まず、東区界隈の魅力について、井澤氏からお話しいただきたいと思います。

井澤氏：
　文化のみちを見ていきたいと思います。名古屋城から白壁、建中寺、徳川園に至る界隈全域を文化のみちと呼んでいます。
　我々白壁アカデミアは白壁地区で活動しています。白壁地域は、江戸時代に徳川が名古屋城下をつくる際に 300 石高級の国頭が住む、600～700 坪程度の中級武家屋敷からなる邸宅地でした。名古屋城から遠くなるに従って格が落ち、足軽と呼ばれた人達でも当時は 100 坪の土地を持っていました。御畳奉行として有名な朝日文佐衛門が 150 石高の敷地に住んでいました。18 歳から 27 年間、いろいろな世相を反映した日記を毎日つけたことで有名です。また、与謝野蕪村の時代に日本の 3 大家であった井上士郎、名古屋を排都と呼ばせ、「尾張名古屋は士郎で持つ」と蕪村に言わせた方です。また、トヨタ自動車の豊田家 3 人兄弟の末弟である佐助さんが住んでおり、その子供の喜一郎さんと愛子さんも住んでいました。また、ソニーの盛田昭夫さんが子供の頃に住んでいた邸宅もあります。ノリタケの最初の工場もありました。また、日本初の国際女優である川上貞奴も住んでいました。川上貞奴は、ピカソがデッサンしたり、ロダンが彫刻を作らせてほしいと申し込んだが断ったり、小説家アンドレ・ジッドがファンになったと言われ、パリ万博で有名になった女優です。
　邸宅の敷地は広く、門から中に入ると玄関まで遠く、途中に石畳や手水鉢があります。白壁という名

前からもわかるように、昔は白壁であったと思われるが、今は黒壁の塀が連なっています。塀の向こうに緑を見越せるのが典型的な武家屋敷であったと思われます。名古屋・岐阜地方の初めての教会であるカトリック教会もあります。また、現存する最古の名古屋控訴院地方裁判所もあり、本来なくなるところを市民運動で残され、現在は市政資料館となっています。市の景観重要建造物で展示スペースとなっている撞木館や、和館と洋館が併設された豊田佐助邸もあります。豊田佐助の娘・愛子さんの婿養子である豊田利三郎氏の邸宅は、門と塀だけを残してマンションが建っており、風情をなんとか残して新たな使い方をしています。著名な建築家である武田五一氏が設計した故春田鉄次郎邸は、保存運動が起きて残されています。

三輪：
　文化のみちについて、古くから残る建物の写真とともにお話を伺ってきましたが、ここで先ほど演武頂いた信長公に再度登壇いただきたいと思います。
　信長公は名古屋城を拠点としてどのような活動をされていますか。

信長氏：
　名古屋おもてなし武将隊は、名古屋城で平日は６武将のうち誰か一人がおり、土日祝日には少なくとも３～６人、陣笠もあわせて最大 10 人が、先ほどの演武をやっておるんじゃの。明日は江戸にも行く予定で、日本全国を飛び回っておるんじゃ。

井澤氏：
　信長公は、東区界隈や文化のみちを歩かれたことはあるのですか。

信長氏：
　わしは主税町は結構好きじゃ。豊田佐助邸あたりのまちなみは非常によいのぉ。京都のように電柱をなくしたり、途中で買い物ができるようにお土産屋や雑貨店などを増やして、みんなが集まれるようにするともっと良いと思いながら歩いておる。

三輪：
　今後、名古屋をどのようにＰＲしていこうと思っていますか。

信長氏：
　名古屋の良いところは、尾張は三英傑が生まれた地で、全国各地に尾張出身といわれる武将が増えたな。尾張は独特の文化をもっており、いやらしいところもけちくさいところもあるが、それを全部含めて元気の源だと思っておる。頑固者で元気な名古屋から、日本中、世界中に笑顔と元気を振りまけていければなと思っておる。

井澤氏：
　東区界隈のまちが変わってきています。まちの変わる原因としては、大きな邸宅が相続税などいろいろな問題があって変わっていくのですが、その筆頭が公共施設の建設であり、白壁では国税の税務署が建設されました。大きな邸宅も高級マンションに変わりつつあります。全てがマンションに建て替えられてしまうと、せっかくの武家屋敷がなくなり、味も素っ気もなくなってしまいます。実際は個人の財産なのですが、市民の財産としてみんなが支えていかなければならないのではないかというのが問題提起です。
　地域には以前は電信柱がたくさんありましたが、現在では地中化されなくなっています。また、レストランや美術館など市民のための施設もできてきています。このように一方ではマンション化し、一方では地域にあった施設が増えてくる流れもあり、その両面が同時に進み、せめぎ合っているのが実情です。
　文化のみちの中間地点には、川上貞奴邸である二葉館があり休憩施設となっていまして、こういった環境の中で人々が生活しているイメージを体験できる、貴重な空間です。ぜひ出かけていただきたいと思います。

信長氏：
　昔の場をもっと蘇らせる計画はあるのか。

井澤氏：
　それが本丸御殿です。

信長氏：
　本丸御殿は名古屋城にあり、他県から来た人も来やすいが、わしはもっとこの二葉館のような場所を他県の人にも見てもらいたいと思うんじゃな。名古屋に住んでおっても、バス停や電車の駅から歩かないといけないので、なかなかそのためには行けない。そこまでの間に、由来ある人の邸宅などを再現する作戦はあるのか。

井澤氏：
　そういったところをつなげていかなければいけないということで、名古屋城から徳川園までを「文化のみち」、名古屋駅から名古屋城までを「ものづくり文化のみち」として考えています。

信長氏：
　有松の通りも非常に厳かでよいので、有松から栄まで全部道でつなげたい。そうすると、他県から名古屋に来たいという人が増える。京都は重要文化財も多く、まちなみも非常に良い。名古屋は重要文化財が少ないので、せめてまちなみで対抗しなきゃいかん。

井澤氏：
　有松も同じように変わってきており、残すという意思がなければ残っていかないと思うので、市民で

支えていかなければいけない界隈です。

三輪：
　東区界隈は、地域での取り組みがされているとのことですが。

井澤氏：
　1998 年に白壁アカデミアを設立し、市民運動として活動しています。よそ者が入ってきても最初は信用されず、地道に活動して３～４年経って、ようやく話をできるようになりました。マンションの問題が出てきたり、このまちを知ってもらえるように活動を進めることによって、10 年ほど経って住民も関心を持って参加していただけるようにようやくなりました。

信長氏：
　住民はどうやって何に参加すればよいのか、それが一番難しい。自分の住んでいる街に対しても何をすればよいのか、わからん。

井澤氏：
　一つには、建物が建てられたり、景観が壊されるという時に、やめてほしいと反対運動を起こすことがあります。また、何かのイベントの時に自分の家を開放するという方法もあると思います。有松ではそういった取り組みもあります。

信長氏：
　わしも今日初めて知ったこともあって、みんなが知れるような仕組みが必要じゃの。そうでないと、みなで力を合わせて一つの街を盛り上げることはできんのでの。今何をすればいいのか、何から協力していいのか、みんなわからんのじゃ。例えば、インターネットで投票して住民が参加できるような仕組みがあるといいと常々思っておるんじゃ。

井澤氏：
　名古屋おもてなし武将隊が今年度に限らず、５年 10 年と名古屋の PR に努めていただき、市民とともに界隈を支えていく、その先頭に立っていただきたいと思います。

信長氏：
　名古屋おもてなし武将隊の HP でメールを受け付けることもできるので、せっかくなのでみんなで何かやりたいと思うのじゃ。

三輪：
　まちづくりにみんなが加わっていただくために何をしていけばよいのか、考えていかなければいけないと実感したところです。最後に、みなさまに一言お願いします。

信長氏：

いつも名古屋城に来ていただき、すごく有難いと思っておる。わしらが結成されて約１年経ち、皆との縁が広がってきて、そして今日のようなええ機会に恵まれてきたところなので、せっかくなので、名古屋をＰＲするだけでなく、みんなで力をあわせて一つのものを作れば、もっともっと尾張が元気な街になると思う。何をすればよいかわからないが、みんなでまちを活気づけることができればよいと思っておるので、そのときは時間があったらでええので無理することはないので協力してくれればうれしいと思う。そして今日来てくれたみんな、ありがとうじゃ。

井澤氏：

みなさんが知らん顔をしていると、いつのまにか消えてしまうのが現実です。ぜひ今日も一つのきっかけにすぎないので、まず知ってもらい、実際に歩いてもらい、何がいいかを感じてもらい、これからどうすればよいのか行動を起こしてもらう、その積み重ねによって、市の財産である文化のみちが残っていくのです。文化のみちだけでなく、有松など次代につなげていくべき界隈がたくさん残っています。

三輪：

ありがとうございました。地域のみなさん一体となって取り組んでいかなければいけないということを感じたセッションでした。

◆総括セッション

古池嘉和（名古屋学院大学地域連携センター長、経済学部教授）
服部明彦氏（名古屋市住宅都市局まちづくり企画部参事）

古池：

最後に、今回のシンポジウムは、当大学地域連携センターと名古屋市との共催でやっております。服部氏に事業の概要をご説明頂いて、総括に変えたいと思います。

服部氏：

名古屋市では、大きな節目の年に、名古屋市の歴史、まちづくりを考えていく大きな柱や考え方を作る「歴史まちづくり戦略」の策定を進めています。名古屋は重層的な歴史があちこちにあり、それが名古屋の歴史であると思っています。昨年実施したアンケートで、名古屋には歴史的なものがたくさんあると思っている市民が多いことがわかり、こういった歴史を大事にしていく取り組みを考え方としてまとめていきたいと思っております。

この戦略では、『人・まち・歴史をつなぎ、絵となり物語となり、時とともに熟成する～「語りたくなるまち名古屋」の実現～身近に歴史が感じられ、もっとまちが好きになる』を目標として掲げています。そして実現に向

けて、①尾張名古屋の歴史的なまちの核や軸などの骨格の見える化、②近代名古屋の産業発展を支えたもの、産業遺産などを生かす、③鎮守の森や建物などもっと身近な歴史に親しむ界隈づくり、④そういった取り組みを地域で支えていけるような仕組みづくり、という大きく４つの戦略を掲げています。現在、この案に対するみなさんのご意見・アイデアを募集していますので、ぜひお寄せください。

古池：
名古屋市では、歴史的界隈という言葉を使っていますが、その言葉に対する思いは何ですか。

服部氏：
先ほど、長者町でのあいちトリエンナーレの展開や、クリエイターズマーケットなどの報告がされていましたが、創造的な活動が都市の魅力となるためには、背景として地域の歴史や土壌が必要で、それがあって初めて心の豊かさも含めて良い都市になっていくのではないかと思っています。その一番身近なものが、歴史的側面で言えば、歴史的界隈であると思います。
歴史的なまちなみ保存に関わっていた市の先輩がされた講演で、歴史的な建物が段々と失われている中で、文化財として価値が高いものは法律的に保存され残されますが、そこまでのレベルではないけれど残したいものは、「ものがたり財」であると聞きました。現場の地域で建物を見ると、脈々と受け継がれてきた歴史的な物語を見ることができると教えて頂きました。それがフィールドとして展開されていくべきなのが、身近にある界隈です。明治 24 年の日本海軍の地図を見ると、歴史的風情が残っている場所は市内に 126 カ所もあり、万華鏡のようにいろんな歴史が見えてくる、それが界隈であり、大事にしていきたいと思います。

古池：
ありがとうございました。界隈は多様性がなければいけないということで、本日はいろいろな視点からお話をいただきました。３つの地区を通じて、もっと足下をじっくり見てみると、歴史的なものや文化がまだ残っていますので、われわれ住民一人一人がもう一度足下を見直して、これをつないでいこうと思いました。ぜひみなさん力をあわせて、それぞれの立場でがんばって名古屋を盛り上げていきましょう。